

## 〈小塩〉の花見

三宅晶子

〈小塩は「小原野花見」だと考えられている。寛正六(1465)年九月二十五日、將軍足利義政が春日若宮御祭見物のため南都下向の際、一條院で行われた四座立会猿樂『蔭涼軒日録』で、竹田大夫(隠居後の金春禅竹)が演じた。表章はこの催しは多武峰八講猿樂形式で、新作能が共演されたと指摘している。<sup>1)</sup>

『伊勢物語』古注釈との関連に言及する論は多いが、伊藤正義の『謡曲集上』「小塩」の解題・頭注に簡潔にまとめられている。<sup>2)</sup>古注の世界を想起させる指摘は、陰陽の神として信仰されていた業平像を知る上で有用で、それをシテに投影させて能を鑑賞することも可能である。しかし禅竹は、観客にそれを強要はしていないのではなからうか。

山木ユリは「事件も物語りもカットし、ひたすら和歌を連ねて能に仕立てるといふ新趣向」と指摘。『歌舞髓脳記』「閑曲」の典型を見ると、「世阿弥時代には発見されなかつた美的理念を樹立し、新しい様式と美を持った禅竹時代とも称すべき一時代が確立されつ

つある」とする。<sup>3)</sup>筆者は〈小塩〉に関して二つ論考を発表したが、山木論とこの二稿を承けて、將軍來臨の舞台での新作として、發揮されている独創性的一端を明らかにしたい。

山木が指摘するとおり、「事件も物語りもカット」しているし、それが奇想天外な古注世界に深入りしない手法にも繋がっている。<sup>4)</sup>その分力をいれているのが、能の舞台となっている世界の構築、〈小塩〉の場合今日しかないとはいへないほどの花見日和の描出であろう。

ワキ(ワキツレ同伴)は花見の浮き浮きした気分を口にしつつ登場。小塩明神が祀られる大原野神社に「手向け」すると、神の力が働いていると感ぜられる特別な日である。

続く前シテ登場の段では「散りもせず咲きも残らぬ」様子が強調されているが、注目したいのが、3段でのワキとシテの応対の最後に置かれる(「上ヶ歌」)である。

都べは すべて錦となりにけり 桜を折らぬ人しなき 花衣着にけりな 時も日も月もやよひ あひにあふ眺めかな げ

にや大原や 小塩の山も今日こそは 神代も思ひ知られけれ

傍線部は『拾遺愚草』の歌(最後は「人しなれば」を引用している。桜を手折りかざす人々を詠んだ定家の歌によって、自然界のみならず、人間界にも人工の花盛りを出現させている。そして二重傍線部、〈小塩〉のテーマソングともいえる『伊勢物語』七十六段の歌(下の句は「神代」のことも思ひ出づらぬ)の引用である。この歌は次の4段で改めて取り上げられ、「この地に行幸があつたとき、業平が后とのことを思い出して詠んだのだ」と説明される。この4段(問答)は前場唯一の本説紹介の場面として重要であるが、簡略で具体的な情報は省かれており、それを補っているのが間狂言である。<sup>5)</sup>一方3段での引用は『伊勢物語』から切り離されていて、「今日の様子は神代も連想させる」と、花盛りの賛美に転用されているのである。定家の歌は神代に匹敵する類いまれな美しさの根拠として用いられ、神代への連想に説得力を与えている。

続く中入りの(「ロンギ」)でシテは夕霞に紛れて姿を消すが、霞は「天も花にや酔」つたように紅に染まっている。シテは霞と一体化するようにその中に消えてしまうので、人間ではないなどという印象を残すことになる。

アイの語りによって、小塩明神でもある業平が衆生済度のために姿を現したことを知ったワキが、さらに奇特を見ようと待つ中、後シテが出現する。「サシ・クセ」では、本説紹

介として在りし日の恋物語に関わる様々な歌を紹介するが、後シテは物見車に乗って登場し、「花見車くるるより 月の花よ待たうよ」と謡うのである。続いて「クリ」は

それ春宵一刻値千金 花に清香月に影惜しまるべきはただこの時なり

と、蘇軾「春夜」を引用し、詩で描かれる宵そのものだと印象づける。後シテは「神代の物語」のためと言いつつ、実は月夜の花見をしたくて降臨したかのようなのである。

舞後の「ワカ」は

昔かな 花も所も月も春 ありし御幸を花も忘れじ 花も忘れぬ

で、傍線部は業平の代表歌「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にして」を踏まえている。二重傍線部は傍線部からの連続性を重視すれば、「大原への御幸ばかりか、そこに咲く花も私は忘れない」ということとなるのだろう（佐成謙太郎『謡曲大観』明治書院1931の解釈）が、謡として素直に聞けば「ありし御幸を」から続くので「花も忘れないだろう、花も忘れない」となる。シテは花の精なのかという印象が生まれる。

さらに続けて終曲部の「ノリ地」では

山風吹き乱れ 散らせや散らせ 散り迷ふ 木の本ながら まどろめば 桜に結べる 夢か現か 世人定めよ 夢か現か 世人定めよ 寝てか覚めてか 春の夜の月 曙の花にや 残るらん

夜明け近い頃合い、山風が吹き乱れ、満開の

花を散らす。散らしているのはシテ自身で、昔を偲ぶ懐旧の舞によって時の経過が示され、時の経過を観じたことで、静止状態で咲き誇っていた花が散る。ここにまた『拾遺愚草』の歌（傍線部。「散り紛ふ木の本ながらまどろめば桜に結ぶ春の夜の夢」の引用）がある。花が乱れ散る中、桜の木の下に眠る人が見る春の夜の夢は恋の気分も伴っており、さぞかし美しいのだろうと感じさせる耽美的な歌である。夢を見ている人、すなわちワキを描写するために使用していることになるが、夢を見せているのはシテの力ということになる。見る夢は業平の恋物語、この歌にびったり合致する。

そこから連続させて『伊勢物語』六十九段の歌二首を組み合わせている（二重傍線部）。

君やこし我や行きけんおもほえず夢か現

か寝てかさめてか

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつ

とは世人定めよ（定家本「こよひ定めよ」）

今宵の奇瑞は夢なのか現なのか定かではない。それは「世人」（世の中の人）、つまりここでは観客が決めることだとする。ワキは眠っているのだが、実際に小塩明神が出現したのか、ワキの見た夢であったのか断言せず、観客に委ねる手法を用いている。本説紹介として必要な具体的説明を省くことで、業平像が観客の受け取り方次第で変化すると共通する、禅竹ならではの工夫であろう。

前後場を通して昼・夕・宵・暁という時の経過と共に丁寧に描き分けられているのは、

異常な程に美しい花見の一日である。特に個性的なのが神としての本体を現した後シテで、花のイメージが重ねられており、シテは花見の場を支配している。特殊なシテが創り出され、その力によって出現している特別な花見、そこに参加できる特別な観客。この構図は来臨した將軍への祝意となつているのだろう。

前後場それぞれの最も重要な場所には、藤原定家の和歌が引用されており、その和歌の生み出す非現実的な美の力を借りて、和光同塵の神が介入する「花見」が創り出されている。定家に私淑していた禅竹が、定家の歌から発想を得て特別の花見を演出している、と言いたくなるような作法である。

注(1)「多武峰の猿楽」『能楽研究』創刊号1974『大和猿楽史参究』岩波書店2005所収。

(2)新潮日本古典集成『謡曲集上』（伊藤正義校注1983）。「小塩」の詞章もこれを使用する。

(3)「金春禅竹の美と芸論」。「小塩」・「東岸暮頭」をめぐって」（『国文学解釈と鑑賞』1994.11）

(4)「小塩」の間狂言『鎮仙』三八九号1991『歌舞能の確立と展開』ベリかん社2001所収。

(5)「一条兼良と金春禅竹」『中世文学』四八号2003『歌舞能の系譜―世阿弥から禅竹へ―』ベリかん社2019所収。

(6)物見車に乗って登場するのは、「右近」など通常前シテである。その点野宮は、詞章では後シテが破れ車に乗って登場する体を取っていて、本曲との関連が興味深い。

（奈良大学教授）